

第163東京オペラシティ定期シリーズ

7月24日(水) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

第1002回オーチャード定期演奏会

7月28日(日) 15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

第1003回サントリー定期シリーズ

7月29日(月) 19:00開演 サントリーホール

7
/24

7
/28

7
/29

指揮：ダン・エッティンガー

ピアノ：阪田知樹*

コンサートマスター：三浦章宏

モーツァルト：

ピアノ協奏曲第20番 二短調 K. 466* (約30分)

- I. アレグロ
- II. ロマンツェ
- III. ロンド：アレグロ・アッサイ

ー 休憩 (約15分) ー

ブルックナー：

交響曲第4番 変ホ長調 WAB 104『ロマンティック』

(ノヴァーク版 1878／80年版第2稿) (約65分)

- I. 躍動的に、しかし速すぎずに
- II. アンダンテ・クワジ・アレグレット
- III. スケルツォ：躍動的に
- IV. フィナーレ：躍動的に、しかし速すぎずに

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：Bunkamura (7/28)



♪ 本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。

♪ 演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフのご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。

♪ 曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。

♪ 演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。

♪ 演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

出演者プロフィール



©Frøhlingsdorf

指揮

ダン・エッティンガー

Dan Ettinger, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 桂冠指揮者

2010年4月より東京フィルハーモニー交響楽団常任指揮者、2015年4月より同楽団桂冠指揮者に就任。

シエツウットガルト・フィルハーモニー管弦楽団音楽監督、イスラエル・オペラ及びイスラエル交響楽団音楽監督、ナポリ・サンカルロ劇場音楽監督。マンハイム国民劇場音楽総監督も務めた。

英国ロイヤル・オペラ、パリ・オペラ座、ウィーン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、メトロポリタン・オペラなど世界の主要歌劇場に定期的に出演、2015年にはザルツブルク音楽祭にも登場。バイエルン放送響との録音も発表している。

2003年から2008年までベルリン国立歌劇場カペルマイスター兼音楽監督(ダニエル・バレンボイム)助手。新国立劇場には2004年『ファルスタッフ』以来数多く登場し、2006年新制作モーツァルト『イドメネオ』をはじめ、2009・2010年ワーグナー『ニーベルングの指環』全曲公演等、東京フィルとの共演で大好評を博した。

東京フィルには2005年4月定期公演以来定期的に登場し、創造性あふれる指揮で大きな反響を呼んでいる。

7/24

7/28

7/29



©Ayustet

ピアノ

阪田知樹

Tomoki Sakata, piano

2016年フランチ・リスト国際ピアノコンクール第1位、6つの特別賞。2021年エリザベート王妃国際音楽コンクール第4位入賞。

第14回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールにて弱冠19歳で最年少入賞。ピティナ・ピアノコンペティション特級グランプリ、聴衆賞等5つの特別賞、クリーヴランド国際ピアノコンクールにてモーツァルト演奏における特別賞、キッシンゲン国際ピアノオリンピックでは日本人初となる第1位及び聴衆賞。

国内はもとより、世界各地20ヵ国以上で演奏を重ね、国際音楽祭への出演多数。2015年CDデビュー、2020年3月、世界初録音を含む意欲的な編曲作品アルバムをリリース。阪田知樹ピアノ編曲集「ヴォカリーズ」を2022年5月に、「夢のあとに」を2023年7月に、阪田の作曲した「アルト・サクソフォーンとピアノのためのソナチネ」が23年11月に音楽之友社より出版。内外でのテレビ・ラジオ等メディア出演も多い。

2017年横浜文化賞文化・芸術奨励賞、2023年第32回出光音楽賞、第72回神奈川文化賞未来賞を受賞。

楽曲紹介

解説＝広瀬大介

ハプスブルク帝国の首都ウィーン。多くの民族を抱えるこの国家において、それらが集まるウィーンは、新しいものを生み出そうとする原動力と、旧来のものを残そうとする保守性がつねにせめぎ合う、古都ならではの特徴を兼ね備えている。ザルツブルク出身のモーツァルトも、リンツ近郊出身のブルックナーも、自身が生まれ育ったわけではないウィーンという都市への帰属意識は希薄であっただろう。だが、その後半生にこの都市へとやってきて活躍し、評価を高め、後世にまで遺る傑作の数々を生み出した。両者の音楽が、さまざまなひとが集うウィーンにおいて輝きを増し、やがてはウィーン、そしてオーストリアを代表するような音楽へと成長していったことを鑑みれば、年代こそ違え、このふたつの作品をひとときに聴ける今回の演奏会は、文化とは何か、都市の特徴とはなにか、をあらためて考える良いきっかけとなるだろう。

モーツァルト

ピアノ協奏曲第20番 二短調 K. 466

大都会ウィーンへと新たな天地を求めて、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)が故郷ザルツブルクを飛び出したのは、1781年、25歳のときだった。その後紆余曲折はあったものの、モーツァルトは作曲家、ピアニスト、そしてピアノ教師としての活動を順調にこなしていく。当時、まだ演奏会を専門に開くことのできるような、大規模な聴衆を集めることのできるホールは存在せず、オペラなどを上演する劇場を、しかもその休演期間中である四旬節(復活祭の46日前水曜日[灰の水曜日]から復活祭の前日[聖土曜日])に間借りするしかなかった。

モーツァルトは、劇場を使えるこの期間に「予約演奏会」を開催する事を目論んだ。あらかじめ定期会員を募り、自身が作曲するピアノ協奏曲を演奏する、という企画は、やがて熱烈なファンを獲得するに至る。1782～85年の間に作曲

された12作のピアノ協奏曲は、いずれも練習なしのぶっつけ本番で(練習があったとしても一回だけで)上演されたと言われる。

上流階級の社交場でもあった当時の演奏会では、暗い雰囲気醸し出す短調の曲は避けられる傾向にあった。しかし、こうしたドラマティックな音楽を、この頃からはむしろ聴衆の側が求めはじめていた。次代の音楽の担い手となったベートーヴェンはこの曲を好み、自身でも何度も演奏した。

第1楽章の弦楽器によるミステリアスな導入部からはじまる音楽は、なお現代の聴き手の胸にも迫る力強さにあふれている。ピアノ独奏はその妙技を見せるだけでなく、時には雄弁なオーケストラを引き立てる側にもまわることがある。穏やかで美しい**第2楽章**はさまざまな映画などで用いられ、それ単独で名曲の名をほしいままにしている感すらあるが、中間部では嵐のような斬新な曲想が登場する。**第3楽章**のロンドでは、木管楽器の巧みな用法、あるいはカデンツァの後、それまでの主題が短調から長調へと一転。モーツァルトは喜びや悲しみを変幻自在に、そして鮮やかに操ってみせる。

[作曲年代] 1785年 [初演] 1785年2月11日、ウィーンにて

[楽器編成] フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

ブルックナー

交響曲第4番 変ホ長調 WAB 104『ロマンティック』 (ノヴァーク版 1878/80年版第2稿)

アントン・ブルックナー(1824-1896)が、ウィーン音楽院において、通奏低音・対位法・オルガンを担当する教授として同地に着任したのは1868年10月のこと。このとき、すでにブルックナーは44歳になっていた。蛮勇を奮ってリヒャルト・ワーグナーのもとに赴き、交響曲第3番を献呈し(1873年)、『ニーベルングの指

環』初演を経験(1876年)。翌77年には、その『第3番』が初演されるも大失敗に終わる。教会音楽とワーグナーの語法を高次元で融合しようとしたブルックナーの理想は、作曲家自身にとってもその実現はなお遠いものであり、聴き手にはもちろん、まだまだ馴染みのないものであった。ブルックナーは確かにワーグナーの音楽に心酔していたが、自身が研究したのはモーツァルト、ハイドン、ベートーヴェン、シューベルトの交響曲であった。ブルックナーは、いまだどの交響曲も試みたことのないほど巨大な交響曲を作るにあたり、主題と形式との間でどうバランスをとるかに悩み、成熟に長い年月を要した。ワーグナーの世界観に影響を受けているとすれば、ブルックナーが冒頭楽章に寄せた説明にあるだろう。中世の街を馬に乗った騎士が疾駆する、というその説明は、歌劇『ローエングリン』の世界観に影響を受けたものであり、みずからこの作品を「ロマンティック」と呼ぶイメージの源泉ともなった。

交響曲第4番の作曲、初演、改訂の一連の流れを追うと、ブルックナーの逡巡だけでなく、その音楽の語法がどのように世人に評価され、受容されていったかの過程を追うことができる。『第3番』第1稿の作曲完了は1873年12月31日。わずかに元旦だけ休みを取った後、『第4番』第1稿の作曲開始は翌74年1月2日から始められた。約1年をかけて全曲が完成するが、その後は演奏の機会を得られぬままに放置される。

交響曲第5番が作曲され、先述の『指環』を聴いた後に一念発起して手がけられた「第1次改訂の波」の際、1878年に全楽章が改訂された。また、初演を念頭に置いた形で、1880年にはさらに第4楽章だけが改訂され、よりすっきりとした形へと書き直される。現在、ブルックナーの意図をもっとも反映した最新の「改訂」とされ、もっとも頻繁に演奏されているのは、この訂正を反映した「第2稿」と呼ばれるもの。第2稿は、1881年にハンス・リヒターの指揮、ウィーン・フィルによって初演された。このときの初演の批評は、必ずしも全面的な賛辞に貫かれているわけではない。成功を収めたであろうことは窺えるものの、「完全に理解できない作品ではあるが、作曲家の尊敬に値する、大変好感をもてる性

格のゆえに、この成功を喜ぶ」(ノイエ・フライエ・プレッセ紙)という留保付きの表現が目を惹く。

ブルックナーが施した改訂のほとんどは、展開部の要所で主題の性質を変化させ、この長大な交響曲をより効果的に聴かせようとした。第2稿における最も大胆な変更は、スケルツォ楽章(第3楽章)の差し替えである。第1稿におけるこの楽章は、作品全体の中で唯一、主題的要素が与える印象が薄く、展開や反復に耐えるだけの重みを欠いていた、と作曲家が判断したのだろう。また、第1稿の第4楽章に用いられていた演奏至難な5連符が、より演奏しやすい2+3の形へと直されたことも、大きな改訂の一つとしてあげられる。

【作曲年代】1880年(第2稿) 【初演】1881年2月20日ウィーンにて、ハンス・リヒター指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団による

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部

ひろせ・だいすけ(音楽学、音楽評論)／1973年生まれ。青山学院大学教授。日本リヒャルト・シュトラウス協会常務理事・事務局長。著書に『オペラ対訳×分析ハンドブック シュトラウス／楽劇 サロメ』『同／楽劇 エレクトラ』(アルテスパブリッシング)など。『レコード芸術』など各種音楽媒体での評論活動のほか、NHKラジオへの出演、演奏会曲目解説・CDライナーノーツの執筆、オペラ公演・映像の字幕・対訳などを多数手がける。